様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2014
課題番号：２２５２０４９３

研究課題名（和文）再帰代名詞の文法化現象を基に照応理論を構築する研究

研究課題名（英文）An Investigation into a Theory of Anaphora with Special Reference to the Grammaticalization of Reflexive Pronouns

研究代表者
野口　徹（NOGUCHI, Tohru）

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：２０２７２６８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の主な目的は、英語と日本語に見られる再帰形式が統語的・形態的・意味的にどのような特性を持ち、どのような歴史的経緯を経て現段階に至ったのか、また理論的にどのような問題をもたらすのかといった点について、一般言語理論と文法化の研究とを対照させながら、望ましい方向性を探ることである。そのために、英語のself形態素が辿った歴史的経緯と日本語の和語と漢語による再帰形式の成立状況について詳細に比較検討を行った。一部の研究者が主張するように一致や移動によって説明されるべきではなく、再帰形態素の編入操作によって説明されるべき事象であり、語彙的操作と統語的操作の間には阻止の関係が存在することが判明した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to investigate the morphosyntactic and semantic properties of reflexive forms in English and Japanese from synchronic as well as diachronic viewpoints, and to consider the way they should be analyzed in generative grammatical terms vis-à-vis the recent development of grammaticalization approaches, thus aiming at a synthesis of the two. Historically speaking, there are various ways to reflexive-mark predicates in English as well as in Japanese, but because of its historical quirk Japanese has developed a system where native and Sino-Japanese reflexive forms co-exist, although the latter have eventually prevailed as productive forms. This type of variation cannot be explained in terms of syntactic operations of Agree/Move, as proposed by some researchers, but should be attributed to incorporation in the lexicon as well as in the syntax, the relation between them showing the effects of blocking and being governed by the principle of economy.

研究分野：理論言語学

キーワード：再帰代名詞　再帰形式　再帰性　照応　文法化

１．研究開始当初の背景

(1)　文法化現象は機能主義類型論の立場から研究が行われることが多く、通時的変化に対する記述的な研究がほとんどである。その一方で、再帰代名詞の文法化については、Faltz (1977)により、具体的な提案がなされている。Faltz によれば、再帰代名詞は、身体表現や人称代名詞から生じ、動詞との形態的融合を経て、中間態動詞、語彙形式へと変化する。しかし、このような変化の背後にある仕組みについては、明らかにされていなかった。

(2)　Chomsky (1981)以降、照応理論を文法理論に位置づける取り組みがなされてきた。Reinhart and Reuland (1991, 1993)では、述語に対する「再帰表示」という概念を中心に据えた修正が施され、Safir (2004)では、競合という観点から、従来とは異なる提案がなされた。また、Reinhart and Siloni (2005)では、再帰化が語彙的になされる言語と統語的になされる言語があるという提案がなされた。なお、Noguchi (2005)では、Chung and Ladusaw (2004)の不定名詞句の意味解釈の分析を採用し、LF のレベルで再帰代名詞の意味解釈を統一的に行う分析が提案された（Reuland 2001 も参照）。

(3)　一方で、極小主義プログラムに基づく束縛理論の修正案が提案され、Kayne (2002), Boeckx, Hornstein and Nunes (2007)などでは移動に基づいた分析が、Heinat (2008), Rooryck and Vanden Wyngaerd (2011)などでは一致に基づく分析が提案された。また、Reuland (2011)では極小主義プログラムに基づきながらも、モジュール化された照応理論も提案されるなど、照応の問題に対する理論的考察がさまざまな角度からなされるようになっていた。

２．研究の目的

(1)　主に英語と日本語の再帰代名詞の文法化を、形式と意味の点からタイプに分け、データの収集と整理を行う。英語については、比較的数多くの記述的研究がなされてきたが、日本語の再帰代名詞の歴史的変化についてはほとんど研究がなされていない。本研究では、英語の再帰代名詞の文法化の特徴を明らかにした後、日本語の再帰代名詞の歴史的変遷に見られる特徴を文献資料に基づき明らかにする。

(2)　(1)の文法化のデータを基に理論的問題点を明らかにし、再帰代名詞の文法化現象に説明を与える照応理論の構築を図る。とりわけ Reinhart and Reuland (1993)以降に提出された照応理論の分析モデルを批判的に検討し、再帰形式の文法化現象に妥当な説明を与えうる照応理論の構築を目指す。

３．研究の方法

(1)　主に英語の再帰代名詞の通時的変化に見られる特徴を研究書と文献資料を基に整理する。特に self 形態素による再帰表示が成立する形態統語論的・意味的条件について、歴史的観点から考察を深める。

(2)　主に日本語の再帰代名詞の通時的変化に見られる特徴を研究書と文献資料及びオンライン・データベースを基に整理する。特に和語による再帰表示（例　「体を洗う」、「身を清める」、「心を悩ます」）と漢語による再帰表示（例　「自分を欺く」、「自己批判する」、「自慢する」）の成立過程について、両者の成立時期を調査し、両者にどのような関係が見られるか詳細に検討する。

(3)　文法化の観点からなされた諸言語の再帰形式の成立過程に関する先行研究から（例 Ogura 1989, Kemmer 1993, Peitsara 1997, König and Vezzosi 2009 など）、再帰形式の成立に見られる一般的な特性を整理する。その上で、日本語の再帰形式の成立過程との比較を行い、日本語の再帰体系の特徴付けを行う。

(4)　照応理論に関する先行研究の特徴を整理し、理論上の問題点及び経験的に妥当な照応理論が備えるべき道具立てについて検討を行う。

(5)　研究成果を学会等で発表し、論文として公表する。また、今後の検討課題を明確にし、以降の研究に繋げる。

４．研究成果

(1)　英語の self 形態素が付加詞から主要部要素へと変化し、その過程で形容詞から名詞へと変化する点を研究書と文献資料を用いて検証した。過渡期の中英語期には、self 形態素以外にも人称代名詞による再帰化が存在したが、その区別は述語の意味により条件づけられていた（Ito 1978, Peitsara 1997 参照）。また、モホーク語のような名詞句が A 位置に生じない言語において、self 形態素が動詞複合語の要素となっていなければならないという事実もあり（Baker 2001 参照）、名詞編入操作を仮定することにより、統一的な説明が可能となるという結論を得た。

(2)　従来明らかにされていなかった、日本語の再帰形式の成立過程を明らかにした。上代日本語では再帰性を示す固有の形式が成立しておらず、中古期に入り和語の身体表現による再帰表示が現れるものの、中世以降漢語による再帰形式が生じることにより、両者が

共存する時期に入り、棲み分けが進むことで、近代以降現代日本語の再帰形式の体系が成立したと考えられる。具体的には、中古期には「身」が身体的行動を表わす述語の項として、「心」が心理述語の項として生じることで再帰性を表わす手段を獲得したものの、中世以降「自己」、「自身」、「自分」が再帰形式として用いられるようになり、和語によるものが慣用表現として残ったものがある一方で（例　「身を捧げる」)、漢語によるものが生産力の高い形態素として文法化され（ただし、一部は「自分を見失う」、「自制を求める」などのように語彙化したものもあり)、両者が併存する現代日本語の再帰形式の体系の成立に繋がったことが分かった。

(3)　英語と日本語の再帰形式の体系の比較的考察を基に、再帰性をもたらす要因が述語と名詞句主要部との密接な関係にあり、理論的には名詞編入操作によると考えることが望ましいと結論づけた。

(4)　日本語の再帰形式と軽動詞構文との関係から、Kishida and Sato (2012)による「自」を接頭辞とする動詞の派生の仕組みを批判的に検討し、漢語由来の「自」、「自己」、「自身」といった再帰形式がそれぞれ語彙レベル、統語レベル、論理形式レベルといった文法の異なるレベルで再帰表示として機能し、語彙的再帰化は統語的再帰化を阻止する関係にあるという提案を行った。従来説明がなされていなかった「身体を洗う」「自殺する」の容認可能性に対して、「＊自分を洗う」「＊自分を殺す」の非容認性のような区別が、この点から説明できることになる。従って、身体表現や人称代名詞による再帰化（例　「顔を洗う」、「歯を磨く」、「我を忘れる」など）は、語彙レベルでの再帰化と捉えることが可能となった。理論的には、Reinhart and Siloni (2005)のパラミターは日本語のように和語と漢語に基づいて再帰形式を文法化している言語では成立しないことになる。

(5)　今後の課題として以下の点を確認した。①理論的には名詞編入操作による分析が望ましいと考えられるものの、再帰形式の文法化現象を生成文法理論の観点から十分な説明がなされたという段階にはいたっていない。②再帰代名詞による他の機能（強調用法、発話主体指向性(logophoricity)など）と再帰用法との関係についても、生成文法理論の観点から明らかにする必要がある。

＜引用文献＞

① Baker, Mark C., *The Atoms of Language: The Mind's Hidden Rules of Grammar*, 2001
② Boeckx, Cedric, Norbert Hornstein and Jairo Nunes, Overt Copies in Reflexive and Control Structures: A Movement Analysis, *University of Maryland Working Papers in Linguistics* 15, 2007, 1-46
③ Chomsky, Noam, *Lectures on Government and Binding*, 1981
④ Faltz, Leonard M., *Reflexivization: A Study in Universal Syntax*, 1977
⑤ Heinat, Fredrik, *Probes, Pronouns and Binding in the Minimalist Program*, 2008
⑥ Ito, Eiko, Reflexive Verbs in Chaucer, *Studies in English Literature by the English Literature Society of Japan: The English Number*, 1978, 65-89
⑦ Kayne, Richard S., Pronouns and their Antecedents, *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, 2002, 133-166
⑧ Kemmer, Suzanne, *The Middle Voice*, 1993
⑨ Kishida, Maki and Yosuke Sato, On the Argument Structure of *Zi*-Verbs in Japanese: Reply to Tsujimura and Aikawa (1999), *Journal of East Asian Linguistics* 21, 2012, 197-218
⑩ König, Ekkehard and Leizia Vezzosi, The Role of Predicate Meaning in the Development of Reflexivity, *What Makes Grammaticalization? A Look from its Fringes and its Components*, 2009, 213-244
⑪ Noguchi, Tohru, Semantic Composition in Reflexivization, *Proceedings of the HPSG05 Conference*. 2005, 540-560
⑫ Ogura, Michiko, *Verbs with the Reflexive Pronoun and Constructions with* Self *in Old and Early Middle English*, 1989
⑬ Peitsara, Kirsti, The Development of Reflexive Strategies in English, *Grammaticalization at Work: Studies of Long-term Developments in English*, 1997, 277-370
⑭ Reinhart, Tanya and Eric Reuland, Anaphors and Logophors: An Argument Structure Perspective, *Long Distance Anaphora*, 1991, 283-321
⑮ Reinhart, Tanya and Eric Reuland, Reflexivity, *Linguistic Inquiry* 24, 1993, 657-720
⑯ Reinhart, Tanya and Tal Siloni, The Lexicon-Syntax Parameter: Reflexivization and Other Arity Operations, *Linguistic Inquiry* 36, 2005, 389-436
⑰ Reuland, Eric, Primitives of Binding, *Linguistic Inquiry* 32, 2001, 439-492
⑱ Reuland, Eric, *Anaphora and Language Design*, 2011

⑲ Rooryck, Johan and Guido Vanden Wyngaerd, *Dissolving Binding Theory*, 2011
⑳ Safir, Ken, *The Syntax of Anaphora*, 2004

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① Tohru Noguchi, Some Notes on the Historical Development of Japanese Reflexives, お茶の水女子大学人文科学研究、査読有、11 巻、2015, pp. 53-66

② Tohru Noguchi, Some Notes on the Reflexive Verb Construction in Japanese, お茶の水女子大学人文科学研究、査読有、10 巻、2014, pp. 27-40
http://hdl.handle.net/10083/54899

③ Tohru Noguchi, Some Notes on Verbal Reflexives in Japanese, お茶の水女子大学人文科学研究、査読有、9 巻、2013, pp. 97-111
http://hdl.handle.net/10083/54889

〔学会発表〕（計２件）
① Tohru Noguchi, Reflexive Verb Constructions in Japanese, 第 88 回アメリカ言語学会年次大会、2014 年 1 月 2 日、ヒルトン・ミネアポリス、ミネアポリス（アメリカ合衆国）

② 野口　徹、日本語の再帰形式の諸相について、東京大学英語学研究会、2013 年 9 月 28 日、東京大学（東京都文京区）

６．研究組織
(1)研究代表者
野口　徹（NOGUCHI, Tohru）
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：20272685
(2)研究分担者　なし
(3)連携研究者　なし